

マリアナ沖海戦

石川県 大丸 存量

菊池朝三大佐の訓辞があり、私たち艤装員は乗組員となった。

「大鳳」は連合艦隊の決戦部隊である機動艦隊の第一航空戦隊に編入されて出撃することになった。

(一) 不沈空母「大鳳」完成

私は太平洋戦争中の昭和十九（一九四四）年一月二十五日、「大鳳」艤装員付を命ぜられた。「大鳳」は昭和十六年七月十日に神戸川崎造船所で起工、昭和十八年五月七日進水し、その後艤装工事を進めていた。

私は神戸港で初めて「大鳳」を見て、ビルディングかと思う巨艦に驚かされた。あちこちで溶接の火花、ドリルの響き、ハンマーの音などがしていた。造船技師、工員の方が昼夜兼行で「大鳳」の完成を急いでいた。艤装もほとんど終わったのでいよいよ出港することになった。

二月三日、神戸より呉軍港に回航、諸種の公式テストを実施して臨戦準備を終えた。三月七日、建造完成、軍艦旗掲揚、「大鳳」と命名され、艦長・

(二) 「大鳳」洋上に出撃

「大鳳」は三月二十五日、呉より徳山に回航され、最後の臨戦準備に入る。二十八日、徳山を後に内地に別れを告げ、豊後水道を通過、太平洋上に出て、台湾沖、南シナ海を経て、四月六日、シンガポールに寄港する。ここで燃料、食料、軍需品を搭載する。港近くの倉庫からは麦のカマス袋を担いで搬入したが、肩がずしんとして重く、ふらふらしながらの作業でした。また、二五ミリ機銃弾丸一箱、一〇センチ高角砲弾丸一発ずつを肩にして「大鳳」舷外のラツタルを上ったが、落ちれば海中であり、冷や冷やの連続でした。

ここで上陸を与えられた友と同行して、港より列車でシンガポールの街を見物した。上陸の際に

病原菌のことに注意されていたのでバナナは買わなかった。笛を吹いたコブラの蛇使いを見た。暑くてのが乾き友と喫茶店で冷たいコーヒーを飲んだ。その味は今でも忘れられない。

四月十五日、シンガポールよりスマトラ島の東北岸、リンガ泊地に回航した。「大鳳」はここで、すでに入泊していた第一航空戦隊の「翔鶴」「瑞鶴」の二空母と合流した。機動艦隊を率いる司令長官・小沢治三郎中将は「翔鶴」より「大鳳」に移乗し、「大鳳」はこの機動艦隊の旗艦となり、将旗を掲げ進撃した。

(三) 機動艦隊の集結

五月十一日、リンガ泊地を出港、五月十五日、タウイタウイ湾に到着する。この湾はフィリピンの最南端でボルネオに近く、琵琶湖ぐらいの大きさである。

ここに集まった機動艦隊の総兵力は、

第一航空戦隊空母三（大鳳、翔鶴、瑞鶴）

第二航空戦隊空母三（隼鷹、飛鷹、龍鳳）

第三航空戦隊空母三（千歳、千代田、瑞鳳）

戦艦六（大和、武蔵、長門、榛名、金剛、扶桑）

重巡洋艦十一、軽巡洋艦二、駆逐艦三十三、

補給艦艇十二、総数七十三隻

実に壮観であった。

ここで約一カ月、空母で航空機搭乗員の発着訓練を行ったが、湾の内外ともに潜水艦攻撃に脅かされていて実施には困難をともない、予定通りの訓練は出来なかった。

六月になり駆逐艦が数隻撃沈された。私は夕刻だったが、右舷艦橋下甲板上から沖の方向の空が真赤になり、艦が燃え、大火災が起こっていたのを見た。

このような状況であったが、「大鳳」の飛行甲板では夕刻に軍楽隊演奏や映画もあって、私たちを楽しませてくれ、士気も大いに上った。

(四) 米軍マリアナ諸島に進攻

六月十一日、米機動艦隊がマリアナ諸島のサイパン、テナアン、グアム島に対し空襲及び艦砲射

撃を加えてきた。この方面に米軍が上陸し占領さ

れると、米軍はここにB 29重爆撃機の基地を設営し、日本本土が空襲されることになる。どんなことをしても守らねばならないことから、以前から「あ号作戦」が計画準備されていた。

その要諦は、米軍の侵攻に対して、日本海軍は空母を主力とする機動艦隊で、先制攻撃によって米軍を撃滅させるという作戦であった。

私たち「大鳳」の砲術科は艦橋下の飛行甲板に集合、砲術長より敵情を説明され、今度の決戦がいかに日本の勝敗にかかっているか、大いに奮励努力するようにと訓辞された。

六月十三日午前九時、機動艦隊はタウイタウイを出撃。十四日、ギマラス泊地着。ここは中部フイリピンのバナイン島とネグロス島との中間で、全艦ここで最後の燃料補給を終えた。

(五) 「あ号作戦決戦発動」発令

六月十五日、米軍主力はサイパン島に上陸してきた。もはやここに至って、旗艦「大淀」(内地広

島湾)の連合艦隊司令長官豊田副武大将より「あ号作戦決戦発動」が発令された。機動艦隊旗艦「大鳳」のマストに「皇国の興廢此の一戦に在り、各員一層奮励努力せよ」の乙旗が掲げられた。

直ちに午前八時ギマラスを出撃、フイリピン諸島のルソン島に寄り、サンベルナルジノ海峡を通り、日没近く太平洋上に出た。速力二十ノット、対潜警戒、ジクザク航海、東へとマリアナ方面に進撃を続けた。

十八日午後、索敵機よりサイパン方面、小沢艦隊から東南東三百八十カイリの地点に、米機動艦隊を発見の報が入った。しかし日没近くのため、攻撃機発進は明日に延期された。

(六) 攻撃隊出撃

六月十九日、決戦の日、雲はあるが晴れていた。針路五十度、速力二十ノットで進撃した。黎明、午前四時頃、空母より索敵機四十三機が発進した。機動艦隊の前衛は栗田建男中将率いる第三航空戦隊、次の中央は小沢治三郎中将(旗艦「大鳳」)率

いる第二航空戦隊、その後を追って城島高次少将率いる第一航空戦隊の順に進んだ。

そのうち午前七時頃、索敵機より、サイパン方面、小沢艦隊より東北東三百八十カイリの地点に米空母群の機動艦隊発見の報告があった。

事實は米機動部隊、空母大小二十九、戦艦十四、巡洋艦二十五、駆逐艦八十六、計百五十四隻の大兵力で日本海軍との決戦を企図したものであった。

この敵に対し第一次攻撃隊が出撃した。午前七時三十分、第三航空戦隊より六十三機、午前八時、第一航空戦隊より百二十三機、「大鳳」より艦攻「天山」九、艦爆「彗星」十八、零戦十六、計四十三機が出撃したので、手あきは手を振ってこれを見送った。そのあと直ぐ自分の戦闘配置で攻撃に備えた。

(七) 「大鳳」に魚雷一発

私は右舷前部の下部艦橋、第一群二五ミリ三連装機銃射撃装置にあって自動照準機を操作し、両耳に受話器を当て、防空指揮所からの射撃命令を

待っていた。

その時突如として叫び声が入ってきた、何が起こったのかと思う間もなく下部にドーンと大きな音、海水がサツと飛んできた。私の体は射撃装置からはじき出された。「右舷前部に魚雷命中、戦闘航海に差し支えなし」との艦内放送があった。

「大鳳」から第一次攻撃隊を午前八時に見送って、ほっとした直後の午前八時十分魚雷一発受けた。米潜水艦「アルバコア号」が魚雷六発発射、「大鳳」は避け切れず、一発が右舷前部のガソリン庫付近に命中した。

被雷直前に「大鳳」から第一次攻撃機のうち最後の「彗星」一機が魚雷の航跡を発見し、急降下して突っ込み体当たりした。その搭乗員は小松咲雄兵曹長であった。艦は少し右に傾斜したが、間もなく元どおりになった。さすが不沈空母「大鳳」だと思った。

(八) 「大鳳」大爆発

「大鳳」は魚雷命中の衝撃で飛行甲板前部エ

ペーターが故障、途中で停止してしまった。工作科員がその穴を木材などでふさぐ応急処置をした。ようやく第二次攻撃隊を発艦できるようになった頃、何か艦内に異常が感じられた。そのうち「火気、電気、スパークなどに注意するよう」放送された。

私は下部艦橋の機銃射撃装置でこの状況を見ることが出来たので不穩に思っていた。突然、ドカンと大音響、私は射撃装置回転上から放り出された。「大鳳」が大爆発したのだった、午後二時三十分であった。

一大音響と共に艦首右舷の鉄鋼板が、めくれて反り返ってきた。黒煙と赤い炎が吹き出し頭上に迫った。五百キロ爆弾に耐える飛行甲板も中央が盛り上がり、中から火傷の人が這い出してきた。艦橋後部の円筒型電探室で倒れて既に死亡したのか、顔のあごあたりが裂傷して赤く見えた。どうしようもなかった。

艦橋から防毒マスクをつけた士官がきて、右舷

から手旗信号を護衛の駆逐艦に送られた。白い軍服、背の高い精悍な風貌、機動艦隊司令長官小沢治三郎中將である。カッターが卸され、司令長官は司令部要員と共に乗って退艦された。以後駆逐艦「若月」重巡「羽黒」空母「瑞鶴」で指揮をした。

火災はいたる所で発生、弾丸は誘発し、パンパンはじくのは機銃、ドカンドカンと大きな音は高角砲の弾丸、弾丸を海中に捨てよと伝えられた。やがて全艦の機能は停止し「総員退去して、飛行甲板後部に集合せよ」との命が下った。

それまでに海中に飛び込む者もいた。甲板から下を見ると高く吃水九・六七メートル、飛び込んでも、また泳いでも、果してどうなるかわからない、そう思って、火と煙のもうもうとする中を通って、後甲板に集まった。

(九) 「不沈空母・大鳳」の最期

駆逐艦「磯風」が「大鳳」の艦尾に近づいたが、波浪のため横付け困難、ようやく「磯風」と「大

鳳」の後甲板との間に橋板を掛けて、重傷者は担架に乗せて、私たちはその後で渡った。

「磯風」に救助されて「大鳳」を離れて振り返って見ると、艦長・菊池朝三大佐が紺色の外套を着て、体をロープで縛りつけ、艦と運命を共にされた。後日、「瑞鶴」で負傷者を見舞っておられた。救助された由である。

やがて四〇度ぐらい傾斜、艦尾より静かにマリアナ沖に、日本海軍の誇る不沈空母「大鳳」が遂に沈没した。昭和十九年六月十九日午後四時二十八分、北緯二度五分、東経一三八度一二分、サイパン西方五百カイリの地点である。

「大鳳」の戦死者は七百七十五人（乗組員千四百四十八人）、空母攻撃機は第一、第二次三百二十四機（うち撃墜未帰還、自爆、不明二百八機）、空母「翔鶴」も魚雷三発が右舷に命中して沈没。私は「磯風」に救助され「瑞鶴」に移乗、ここに戦いに敗れ内地に引き上げた。

間もなくサイパンを占領され、本土空襲は激し

くなり、敗戦の運命をたどっていくのであった。

私は幸いにも戦後半世紀を経た今日まで、長生き出来たことに感謝し、戦死された英霊のご冥福をお祈りし、戦争体験を終わります。

【解説】

「絶対国防圏」と名付けられた我が国の戦争遂行上絶対護らなければならない要域があった。

千島列島―小笠原諸島―内南洋中西部―

西部ニューギニア―スンダ列島―ビルマ
これらを結ぶ防衛ラインであった。

このライン策定直後から、米軍の攻勢は強化され、昭和十八年十二月にはギルバート諸島を、一月には内南洋中東部のマーシャル諸島に進攻して来た。

ギルバート諸島のマキン島、タラワ島の守備隊は玉砕、マーシャル諸島もクエゼリンなど各島の陸海軍守備隊は次々と全滅した。

連合艦隊は、司令長官の新任を受けた新司令部

では、昭和十九年三月に「新乙作戦」を策定、発令した。

この「新乙作戦」は米軍が進攻するニューギニア北岸からパラオ諸島を経て比島へ向かうマッカーサー軍の進攻ルートと、中部太平洋を横断して日本本土に向かうニミッツ軍の二つのルートがあるが、連合艦隊は、マリアナ諸島―パラオ諸島―西部ニューギニアに至る防衛ラインを設定して、マリアナ、パラオ、西部ニューギニアの何れかで邀撃するといものであった。

三月三十日、三十一日、連合艦隊司令部のあったパラオ諸島が米機動部隊の空襲にさらされ、ために同司令部はミンダナオ島のダバオに、二式大艇二機で退避したが、司令長官機は行方不明となり、その後、「あ号作戦」が打ち出された。

米マッカーサー軍は五月二十七日、ビアクに進攻、ニミッツ軍はマッカーサー軍とは別にマリアナ諸島の中心地サイパンへの進攻を計画した。

体験記執筆者は、昭和十九年一月二十五日、「大

鳳」艦装員付を命ぜられ、「大鳳」の進水後の艦装を待つて三月七日、「大鳳」と命名され、乗組員となった。

六月十一日、米機動艦隊がマリアナ諸島のサイパン、テニアン、グアム島に対し攻撃を加えてきた。ここで以前から準備されていた「あ号作戦」が発令され、米軍の侵攻に対して、日本海軍は空母を主力とする機動艦隊の先制攻撃によって米軍を撃滅させるという作戦であった。

体験記執筆者たちは「大鳳」の艦橋下の飛行甲板に集合、砲術長より決戦の重大さを訓辞される。

六月十三日午前九時、機動艦隊はタウイタウイを出撃。ギマラス泊を経て最後の燃料補給をする。

六月十五日、米軍主力はサイパン島に上陸、旗艦「大淀」の連合艦隊司令長官豊田副武大将より

「あ号作戦決戦発動」が発令され、機動艦隊旗艦「大鳳」のマスストには「皇国の興廢此の一戦に在り、各員一層奮励努力せよ」の乙旗が掲げられた。

この戦闘において、不沈空母「大鳳」は昭和十

九年六月十九日午後四時二十八分、北緯一二度五分、東経一三八度一二分、サイパン西方五百カイリの地点で沈没した。

「大鳳」の乗組員千四百四十八人の内、戦死者七百七十五人、空母攻撃機は第一、第二次三百二十四機、執筆者は「磯風」に救助され内地に引き上げた。